378　心臓サルコイドーシスにおける^{201}Tl-Cl心筋シンチグラフィーの意義

太田淑子，丹下正一，近藤千里，中野敬子，有竹澄江，牧　正子，日下部きよ子，重田帝子（東京女子医大放射線科）　廣江道昭（東京医歯大第二内科）

サルコイドーシスは全身性の類上皮細胞肉芽腫症で，多くの臓器、組織に肉芽腫を形成し，その死因の一つとして心臓死が挙げられる。心臓サルコイドーシス（心サ症）は心筋間質に肉芽腫を形成し結合織増生を来し，その臨床所見は心電図異常から心不全までと多彩である。心サ症における^{201}Tl-Cl心筋シンチグラフィーの臨床的意義について検討した。心内膜心筋生検法にて心臓サルコイドーシスと診断された15例に対して^{201}Tl-Cl心筋シンチグラフィーを施行した。15例中12例に灌流異常が見られ，かつ組織学的には心筋線維化が認められた。心筋シンチグラフィーは心筋病変の評価に有用であった。

379　successful PTCA後再狭窄をきたした症例のfollow up運動負荷心筋シンチ(ECT)の限界

坂田和之，吉田　裕，大谷誠司，森　典子，横山正一，星野恒雄，鏑木恒男（静岡県立総合病院循環器科）

PTCA後6ヶ月以内にrepeat PTCAを行った1枝病変27例のECTが、早期再狭窄検出に有用かを検討した。ECTによる再狭窄検出率は、PTCA後3ヶ月以内より4ヶ月以降で有意に高かった。冠動脈造影による再狭窄確認前のECT所見により陽性群13例と陰性群14例に分けた。ECT施行時期、PTCA前後の冠動脈所見、負荷時血行動態は両群に差はなかった。陽性群は、負荷時胸痛、虚血性ST変化及びECT前胸痛発作の頻度が、陰性群より有意に高かった。陽性群3例と陰性群6例が、ECT後1ヶ月以内に緊急カテーテルを施行された。ECTによるPTCA後の早期再狭窄検出は困難なことが多く、ECT陰性後早期に再狭窄を示す症例も多く、臨床症状に十分注意したfollowが必要と考えられた。

380　PTCA後早期の壁運動異常残存

楢林英樹，樗木浩朗，田代英樹，稲生哲治，竹下　彰（九州大学循環器内科）

PTCA後早期における"stunned myocardium"(SM)の発生率を負荷心筋SPECT及び左室造影(LVG)にて検討した。以下の条件を満たす労作性狭心症14例を対象とした。1. PTCAの標的冠動脈が灌流する局所心筋にLVG上、asynergyを認める。2. その部位にPTCA前の負荷SPECT上、一過性虚血(TI)を認める。3. PTCAの成功例。LVGはPTCA直前及び18時間後に施行。TI検出には定量解析を用いた。PTCA前に、左室の31segにおいて、LVG上asynergy及びSPECTにてTIを認めた。19seg(61%)がPTCAによりasynergyの改善を得た。27seg(87%)にTIの改善を得た。27seg中の10seg(37%)は、TIの改善を認めるのにasynergyが残存しておりSM(well perfused asynergy)の状況を呈していた。

381　Tl-201心筋シンチによる梗塞領域のPTCA後の壁運動改善予測について

渡辺直彦、斎藤富善、矢尾板裕幸、菅家道人、丸山幸夫（福島医大第一内科）池田精宏（星総合病院循環器科）

PTCAが成功した心筋梗塞後狭心症10例においてTl-201(TL)SPECTより求めたPTCAが施行された領域のTL投与10分後と4時間後のｶｳﾝﾄ差と、冠動脈病変のない領域でのｶｳﾝﾄ差の比を相対的心筋血流比(MBF ratio)としてPTCA後の壁運動改善度(⊿%SF)と比較検討した。安静時TLによるPTCA前のPTCA施行領域のMBF ratioは0.75±0.19と正常部位と比べて低く、PTCA後における⊿%SFとは良好な負の相関が認められた。以上より、梗塞領域の壁運動低下は安静時における心筋血流低下の影響も示唆され、PTCA後の壁運動の改善度の予測にはTL心筋シンチによるviableな心筋量を評価するだけでなく心筋血流の評価も有用であると推定された。

382　急性心筋梗塞に対するdirect PTCA：核医学的検討

久保　博，矢野仁雄，長谷川典昭，中村正人，大蔵勝弥，角田太郎，平井寛則，矢吹　壮，町井　潔（東邦大三内）

急性心筋梗塞症へのdirect PTCAの効果を経時的に評価する目的で，発症6時間内のdirect PTCAにより狭窄度が25%以下となった連続16例に負荷Tl心筋SPECTを2週，12週，24週で施行した。(1)12週で再分布の増悪，新たな出現を認めた4例は再狭窄であった（再狭窄率25%）。(2)残り12例のうち2週で4例(33%)に再分布を認めたが12週で全例消失した。(3)Tl uptakeは12週で8例(67%)が2週より改善したが24週でそれ以上の改善はなかった。direct PTCA後少なくとも2週はmyocardial stunningないしはhibernationが存在しているが12週までには改善すると思われる。従ってdirect PTCAの効果判定には梗塞発症12週のSPECT所見が重要と考えられた。

383　急性心筋梗塞Direct PTCA例におけるTl-201運動負荷心筋シンチ再分布現象の意義

名村宏之　山辺　裕　柿本哲也　橋本泰則　吉田裕昭
前田和美　横山光宏（神戸大1内）

急性心筋梗塞(AMI)対しDirect PTCA(d-CA)施行10例と自然開通(spt-R)6例　完全閉塞(occ)9例のTl-201運動負荷心筋シンチ(Ex)所見を比較した。梗塞関連領域の再分布現象(Rd)は各群差がなかったが　負荷時胸痛やST低下を伴うものはd-CA群で少なかった．急性期安静シンチ(Re)とExの初期像(In)のuptake scoreの比はd-CA群で大で運動時冠予備能は良好であった。d-CA群のEx-Rd は梗塞周辺部虚血を必ずしも表現していないと考えられた。

	n	Re uptake	Ex-In/Re	Ex-Rd	EKG-CP
d-CA	10	17 ±10	1.3 ±0.4	8	1
spt-R	6	22 ± 7	0.7 ±0.3	5	3
occ	9	24 ±11	0.3 ±0.2	6	5

Presented by Medical*Online